

看護の視点からのアメニティ創出への試み —ラッピング技法を用いてのアプローチから—

小野清美, 林 優子, 大井伸子, 奥田博之, 山岡聖典¹⁾

要 約

病院におけるアメニティの重要性は十数年前から言われているが, それは建物の建築の時だけでなく, その後療養の場所をどのように維持し, 快適環境を患者にいつまでも提供していくかである。

これまで日常の看護業務において掲示物やパンフレットの置き方, 床頭台のあり方などは整理整頓の一環で病棟管理の中にあった。だが, もう一つの流れがある。ウィリアム・モリスは生活の中における芸術化を考え, 生活用品そのものに美しさと手作りの良さがあることを提唱した。こうした生活デザインの流れの中で, 本研究では本学科棟内において床頭台のディスプレイや掲示の仕方, パンフレットの置き方など, ラッピング技法を使用し, 入院生活上のアメニティの創出を試みた。その後, ラッピング技法を用いたアメニティ創出の試みは患者の心を癒す可能性のあることを明らかにした。また, ラッピング技法使用上の留意点についても指摘した。

キーワード: アメニティ, ラッピング, 入院生活, 色彩, 癒し

はじめに

病院におけるアメニティの重要性は十数年前から言われているが, 最近ではライフデザインとか, 研究デザインのように看護においてもデザインという言葉がよく使われる。看護としてのアメニティを作り出す創作活動としては, 絵画を展示したり, 花を飾ったりしている。しかし, 看護の分野では, ラッピング技法を用いショールームや包みの芸術を生んでいる産業の分野のように, 生活の中における美しさを示すディスプレイなどを工夫した実践活動の研究は見当たらない。

病棟における日常の看護業務においても, 患者のための掲示物やパンフレットをどのように配置するか, 床頭台をどのように整えるかなどは病棟管理に大きく影響するものである。従って, 今後看護婦が日常業務のなかでアメニティのあり方を考える必要性は多々あると思われる。それは建物の建築の時だけに考えるのではなくて, その後, 療養の場所である病院をどのような良き環境にしていくかという点においても必要となる。このことは医療機関のみの

問題ではなく, 地域の場における健康教育においても同様である。

そこで, 本研究では看護の視点からのアメニティ創出の試みとして行ったラッピング技法を活用した実践活動の効果を明らかにすることを目的に, 教員による本学科棟内において行ったアメニティ創出の事例, および看護学生の病院における入院生活にアメニティを創出した事例について, それぞれに検討したので報告する。

研究 方 法

1. 方法

看護場面や日常生活の中で使用されている“モノ”を利用して, ラッピング技法を用いたアメニティ創出を試みた。それらの創作活動は, 著者らが行った床頭台やストローなどによるディスプレイおよびパンフレットや掲示物のディスプレイであり, さらに著者らの創作活動に感化された学生が作ったマスコットなどのアレンジである。

それら創作活動におけるディスプレイなどの手法

は、ラッピング技法である。表色系はPCCS(Practical Color Co-ordinate System)とマンセル値(Munsell System)を用いた¹⁾。PCCSとは配色調和に適している表色系であり、マンセル値とはアメリカで開発された表色系で、単位系として優れたものであり、日本ではJIS規格として用いられている。本論文ではPCCS(マンセル値)(PCCSの系統色名)の順に表している。それらの実践活動の経過をそれぞれの事例を通して評価し考察する。

なお、本研究でいうアメニティとは、設備や施設の環境、特に患者の生活環境の美しさ、心地よさ、快適さと定義し、ラッピング技法とは、ペーパーや包装紙などの材料を使って包んだり、巻いたりして美しく装う技法と定義する。

2. ディスプレイの場所と期間

1) 床頭台およびストローなどを取扱ったディスプレイ

展示場所は本学科棟4階のラウンジを選定した。このラウンジは学生の休息の場所となっていることから、これらのディスプレイにヒントを得、必要に応じケースへのアセスメントを工夫できる可能性があるのではないかと考え、この場所を設定した。展示期間は本学医療技術短期大学部看護学専攻3年生の臨床実習の開始後の25日間(4月17日～5月11日)とした。

2) パンフレットの置き方および掲示方法

パンフレットを本学科棟の4階のラウンジに置いたり、3階の掲示版および筆者の研究室ドアに掲示した。その期間は4月1日～6月30日までとした。

3. 作品の製作者

岡山大学医療技術短期大学部・学生の作品以外は小野清美であり、写真6のみが林優子との合作である。

事例紹介

1) ラッピング技法を用いた床頭台およびストローの取扱い方のディスプレイについて

(1) 床頭台のディスプレイ

床頭台の上のものの置き方によって心が和らぎ、かつ美しく見せることのできる一つの見本として、ディスプレイを示した。日常使用しているカップや急須も装飾として使うようにしたものであり、写真1、写真2が作成したディスプレイである。床頭台



写真1 ラウンジにてディスプレイした床頭台の全景



写真2 ディスプレイの詳細な紹介

はやさしく感じるオーガンジーのリボンを使い、色彩はパステルカラーを用いカップをラッピングし、飾った。プラスチックトレイなどは片面および両面リボンを用い、色彩はdark20(3PB 2.0/5.0)(くらい青紫)とし、これをシールで固定した。

(2) ストローなどによるディスプレイ

重症患者に使うストローを応用した作品のディス

プレイである。日常生活で使用するストローをアレンジし、美しさと心の豊かさを表現した。それを示したものが、写真3、写真4で銅の鍋を使ってディスプレイしている。リボンのイメージから楽しく明るく活発に見せるためにストローはカラフルな色付きストローを使用し、vivid2(4R 4.5/14.0) (さえた赤)、vivid14(5BG 4.5/10.0) (さえた青緑)、金色などのリボンを用い、ストローに結びつけた。また、ストローをシールで飾った。

展示して間もなく、このストローのディスプレイについては、きれいなハンカチを台の上に添えた人がいた。これを筆者が小枝を使い、一枚の落ち葉を連想させるように変化させ、豊かさを加えたものが写真5である。

床頭台とストローのディスプレイの提示について、

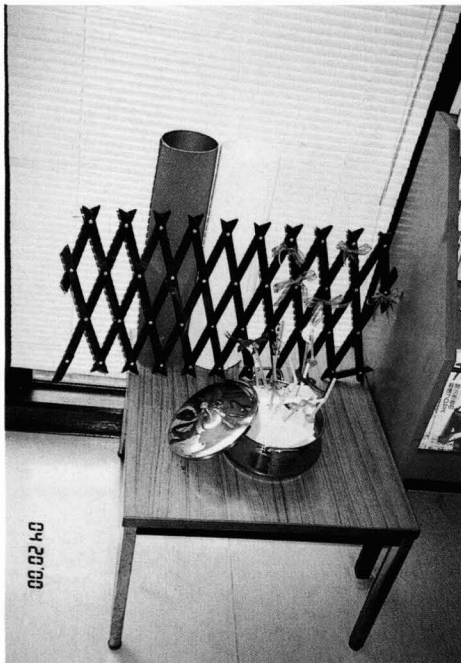


写真3 銅の鍋に示したストローのディスプレイ

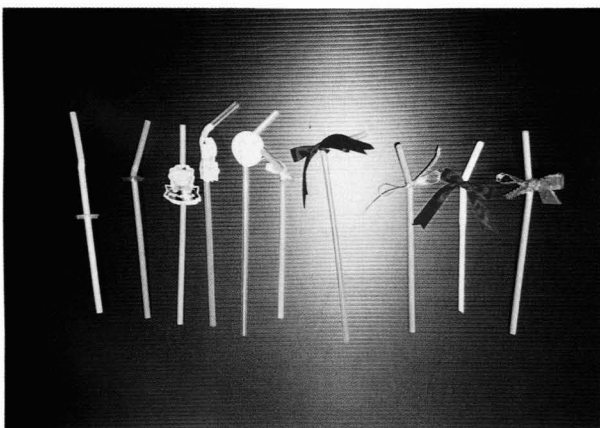


写真4 ストローのリボン掛けとシールの飾り方

一番反応があったのは教員であった。ある教員にコーヒーをご馳走した時、返却にコーヒーカップの取っ手にリボンをつけて返してきた。これをさらに工夫して写真6のように白いレースの紙ナプキンとsoft20(9PB 5.0/5.5) (やわらかい青紫)の紙を受け皿に使用して変化させコーヒーをご馳走したが、その反応は好評であった。



写真5 木の葉のように演出した一枚のハンカチ

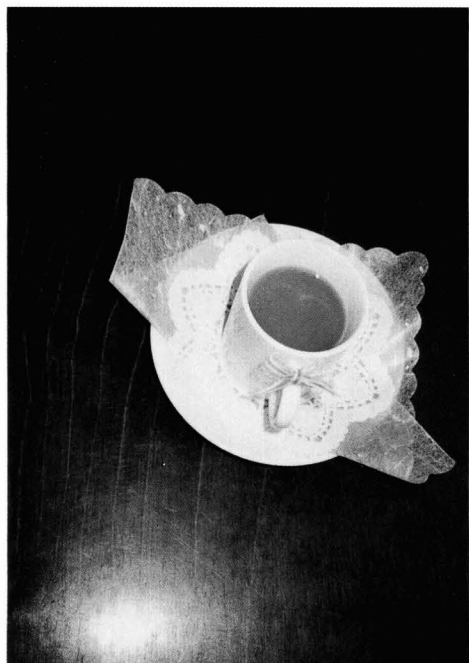


写真6 コーヒーカップのおしゃれの演出

2) ラッピング技法を用いたパンフレットの置き方と掲示方法などについて

(1) ラウンジにおけるパンフレットの置き方

本学科棟の4階のラウンジにパンフレットが置かれていた。ここは dull10 (3GY 5.5/5.5) (にぶい黄緑) の色彩の長椅子が置かれ絵画もあり、落ち着いた雰囲気の場所である。このラウンジにある長椅子との調和の色彩を考慮し、vivid8 (5Y 8.0/13.0) (さえた黄) の色彩の画用紙を使って、円柱を作り同色のサテンのリボンで飾った。これが写真7であり、すばらしい絵画の置かれている場所でも臆することなくパンフレットを置くことができた。また、パンフレットや広報の存在をいろいろな方法で知らせることができることを示すために、研究室のドアにリボンを使い飾ってみた。それが写真8である。



写真7 さえた黄色の画用紙を用いたパンフレットの置き方

(2) 「リスク」をテーマに示したドアや掲示板のディスプレイ

一つのテーマについても一枚のドア面積で表すことができることを示したものが写真9である。これはインターネットから産科の医療事故に関する資料を活用し、リスクの重要性をアピールするためにベースカラーに危険色の vivid2 (4R 4.5/14.0) (さえた赤) を使った。さらに、それをより明確に示すために補色対比で目立つように、蛍光色ではあるが



写真9 「リスク」をテーマに表示したドア



写真8 研究室のドアのパンフレット

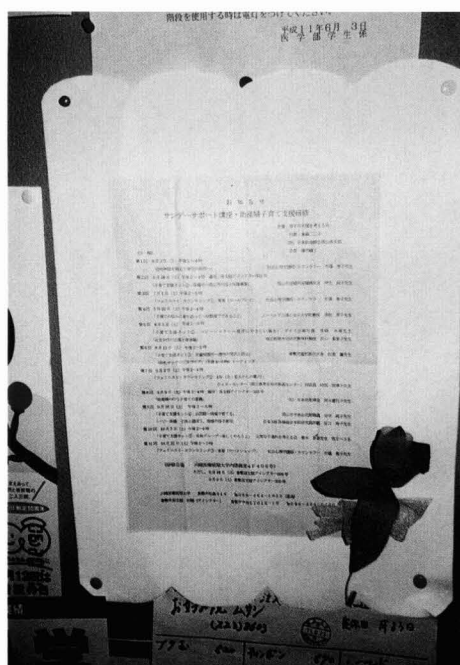


写真10 さえた黄色の画用紙に貼った掲示物

vivid14 (5BG 14.5/10.0) (さえた青緑) のジャケットをサブカラーに使い、小枝で「リスク」の文字を示し、それをビビットに近い色の黄色の反射材で張り付けた。テーマを産科の医療事故としたのでトラウベ (産科用の聴診器) をディスプレイに加え、助産婦学生に対して医療事故に向けて喚起を促した。このディスプレイは蛍光色を利用したことから十数メートル離れた場所や薄暗い夕暮れや夜間でも反射材が光り、アピール効果が高く、珍しさもあり助産婦学生がこれを見る姿が認められた。

掲示板の利用についてはベースカラーを vivid8 (5Y 8.0/13.0) (さえた黄) の前進色に定め、補色対比の vivid20 (9PB 3.5/11.5) (さえた青紫) の造花で飾り、目立たない小さなパンフレットも台紙をつけることで、より印象づけた掲示の仕方ができることを示したものが写真10である。これも他の掲示物よりも明るく、美しさを目立っていた。

(3) 学生によるタンポポの折り紙とマスコットのアレンジ

著者らの創作活動に感化されたある学生が慢性期の長期入院の患者にタンポポの折り紙を作品にして渡したいと言ってきたので、不織布リボン、レースの紙、色紙などを手渡した。その後、学生が作成した作品は、写真11である。これは、患者が作ったものを学生が手を加え一枚の作品に仕上げたものである。

さらに、慢性期病棟で臨床実習中の学生が縫いぐるみとボトルのラッピングをして患者に大変喜ばれたという報告を聞いた。その患者は61歳の男性で、食道がんと診断され、平成12年3月14日に食道がん内視鏡的粘膜切徐術をした。まもなくリンパ管転移がみられたが、手術希望をしなかったため、同年4月17日より、放射線療法と化学療法が開始された。この治療による副作用として、食欲不振、嚥下時の痛み、全身倦怠感などを自覚していくにしたがい、患者は体力に自信を失っていった。また、点滴による拘束感が強いために点滴を拒否していたが、医師より食べることができない時は点滴をするように言われ、精神的重荷を感じていた。学生は、患者は頑固で意志強固な一面を持ち無理をしても何事もやりぬく性格から、苦しみに耐えている患者の様子を感じていた。しかし、学生はどのように患者に関わっているのかわからず援助の手が出せない状況にあった。そうした患者が少しでも元気になって、自信を取り戻すことができるようにという気持ちを込めて

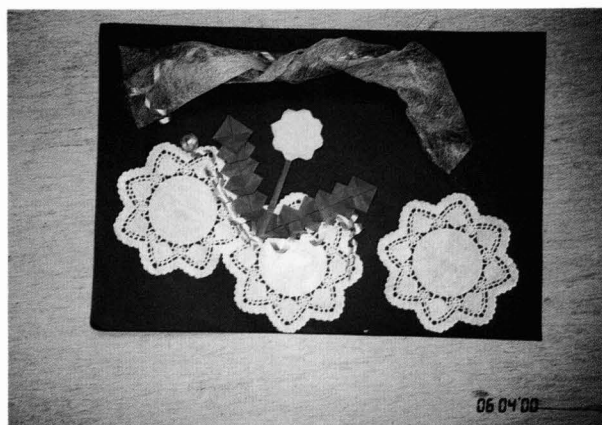


写真11 患者の作ったタンポポと学生との合作



写真12 ゴーの縫いぐるみとラッピングの演出

「元気になるゴー」という「ゴー」の言葉をかけて「象」の縫いぐるみとボトルのラッピングを作り、オーバーテーブルの上に飾って励ました。この作品とディスプレイは写真12である。この創作は、象の色彩は vivid16 (5B 4.0/10.0) (さえた緑みの青) のフェルトを利用し、ボトルには soft6 (8YR 7.0/6.5) (やわらかい黄みのだいたい) の紙に bright24 (6RP 5.5/10.5) (あかるい赤紫) のリボンをかけたマスコットである。サイドテーブルの上に deep18 (3PB 2.5/9.5) (濃い青) の急須、ペットボトルの同色のボトルや牛乳などが置かれているが、これらの品物の環境は寒色系の同一色相及び類似色相、対照トーンで統一され、青色系のグラデーションのような配色となっており、ボトルの色彩はセパレーションを演出し、心地よい環境を生み出していた。

考 察

アメニティ創出の効果について上述した事例から考察する。

1. マスコットの事例とアメニティについて
学生が臨床実習期間中に入院生活環境のアメニテ

ィとして、縫いぐるみとボトルのラッピングのマスコットを作ったことは、本研究で示した床頭台のディスプレイにヒントを得た行動であった。マスコットを中心に考えると、これは偶然にも寒色系の同一色相および類似色相で統一され、対照トーンによる明度と彩度の面積の扱いもうまく表現できていた。また、形状もボトル、牛乳、象などの高さと低さのバランスの配列もよく、これらがリズムカルに縦に伸びた線で構成されており、心地よい環境を生み出していた。

このように手作り用品の他に患者の周囲にある生活用品まで含め、置き方などに着目して病室環境を考えると、常に良い安定した環境を患者に提供できる点で有益であることを認識した。

19世紀後半の創造的なデザイナーであり、人道的な立場で社会改革を主張したウィリアム・モリスは「伝統のある建築や手仕事から学んで、美しさや生き生きとした生活の実感を現代の暮らしの中に生かす²⁾ことを考え、芸術家でありながら事業をも起こした人である。彼は家具や敷物、壁紙などに芸術化・簡素化をあてはめ、生活の利便性と芸術性の調和、つまり、便利さと美しさを追求したと言われている。手仕事への再生によって産業デザインへ大きく貢献したのである²⁾。モリスは生活の中における芸術化の問題を考え、別の美しさを見つけた一人でもあるが、彼の作品はコーヒー茶碗、壁紙など150年にも亘ってわが国においても生活の中で生きつづけている²⁾。

このように生活用品そのものに美しさと手作りの良さがあることは周知のとおりであるが、今回の学生は特別に、色彩や構成などの学習をしていない中で、手作りでマスコットを作成し、日常品を並べ上手にインテリア化した。また、患者の苦痛への配慮から自分の感じるままに色彩を選び、沈静色を示す寒色系を自然に選んだが、落ち着いた色彩と心地よさを感じさせる演出が患者に喜ばれたものであると考えられる。

2. 患者と共に新たな作品の創出があることについて

作品にとっての第三者である見学者や看護職が患者の作品に手を加え新たな作品の創出ができることが本研究でわかった。前述したように患者が作ったものを学生が手を加え一枚の作品に仕上げたり、ストローのディスプレイのように見学者が加えたものを作者が追加して豊かさへと変化をつけたように、

第三者の参加により一層素敵なものにしていく喜びを患者に持たせた。このように入院生活を充実して過ごせるアメニティを周りにいる人たちが作り出していける。しかし、この方法はいつか壊れることも考慮しておかなければならないし、参加した第三者の姿勢によっては作品の良い点をも崩すこともある。そうしたことも覚悟して、快適環境を作らなければならない。

看護職はより好ましく修正する能力が必要になるため常に学習を怠ってはならないし、美術関係者との交流によってこうした試みをする必要性も生じてくるだろう。だが、その場に居合わせた患者、市民、専門職の人たちが同じレベルで、ディスプレイや絵画について語り合い、共にアメニティを創出できること自体に意義がある。

3. 臨床現場のパーソナルギフトの必要性

ある学生が臨床実習の期間中にカードができないかと言ってきた。病棟で「お誕生日、誉める日カード、何かの記念カード」などのように、カードを活用し個人的な祝いや言葉で表現できないことを表すための援助技術の一助にしたいということであった。また、ある教員が患者と撮った写真を差し上げたいので、よいラッピング方法はないかと言ってきた事例もあった。

本研究でラッピング方法を用いたアメニティ創出の試みは、学生や教員が患者に渡したいとするカードや写真のラッピングを創出する動機づけになっていた。そしてそれらは新たにパーソナルギフトについての作品のあり方をも認識させることになった。生きる力と看護の励ましはいかなる時にも必要である。さまざまなラッピングの種類は、遊び、豊かさ、やさしさをキーワードにしたパーソナルな贈り物に類する³⁾。これには基本的には儀礼的な枠はなくパーソナルな志向によって、交換されるものであり、あくまでも、患者個人にとって希望の持てる方向に向けるためのパーソナルな励ましである。

学生が行ったマスコットのようなものの贈答もパーソナルな患者への贈り物である。このように、いろいろなものが患者にとっての励ましへの媒体になるが、日常業務に追われている臨床看護の現場では、励ましへの媒体となるものを看護婦が常に手作りするのはなかなか困難である。しかし、感染症病棟、重症患者、ホスピス、小児病棟、手術後などの患者は、家族や外部との接触を断つことが多く、孤独感を感じることも多い。そのような場面では、看護の

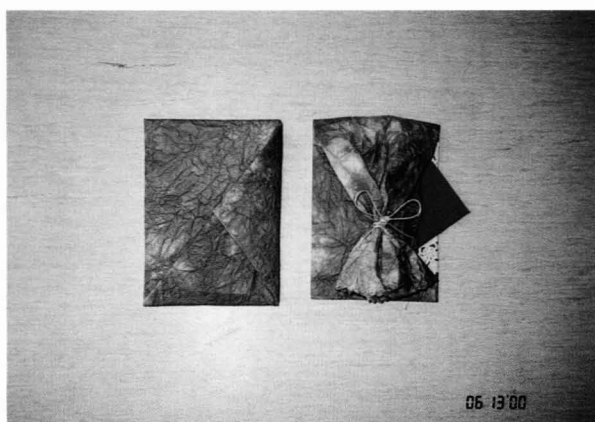


写真13 和紙と水引で作成したカード入れ



写真16 包み紙をリサイクルしたカード入れ



写真14 千代紙を使って作ったカード入れ

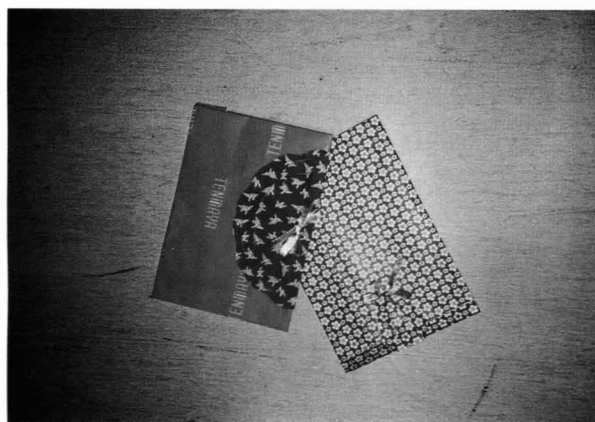


写真15 包み紙をリサイクルしたカード入れ



写真17 ポリエチレンの袋をリサイクルしたカード入れ



写真18 和紙とセロファンを使ったカード入れ

立場でいかに患者の精神的な抑圧をカバーしながら援助していくかは重要なことである。したがって、パーソナルギフトなどのような実践活動をボランティアなどの活用によって推進することも今後、考えていくべき必要性がある。

本研究を通じ、臨床の現場では簡単に誰もができ、しかもカードにもなり、写真など贈答にも使えるものとしてラッピングが要求されたことがわかった。

そこでラッピング技法を用いパーソナルギフト用の作品を作ってみた。それらが写真13, 14, 15, 16,

17, 18などである。和紙(写真13), 色紙などの用品(写真14), リサイクルの包装紙(写真15, 16), ポリプレインの袋で包んだものやリボンの代わりにポリプレインの袋を活用した作品(写真17), 和紙とセロファンを使っただけの作品(写真18)である。

4. ラッピング技法の意義と応用

学会においても、ポスターセッションをするような機会も多くあり、造形、カラー化、イラストなどの力によって、アピールをいかに上手にするかも問われている。それについてラッピング技法は大きな示唆を与えてくれると思う。そうした応用もできるラッピング技法はリボンと紙をベースにして行うが、アレンジの仕方によっては素材をどのように使用してもさしつかえなく、作成者の個性に任されている。すなわち、看護の場面に応じて目的にかなう活用法を人が見つけ、いかに上手に活用していくかが重要となる。そのために色彩、造形、リボン結び、いろいろな素材などを活用して、美しくアピールする方法を知っていれば、臨床現場においても社会と直結した動きを感じながら必要に応じ一つの表現として、身についたアメニティへの看護活動ができるのではないかと考える。

病院内においても利便性と芸術性の調和はアメニティの改善に重要なことである。ところが、臨床現場はとかく科学的なアプローチになりやすい。だが、近年の病院建物は美しく快適性をも満足するものになってきている。それ故ディスプレイの実践には室内のインテリアの状況や色彩、形態や形状などを考慮し、環境を壊すことなく心地よいアメニティを演出できるよう効果的な方法を利用していくことは重要である。そのためには、掲示物や床頭台、パンフレットやポスターの置き方などの扱い方に留意する必要があるものは、ラッピング技法の基本原則を知った上で、上手に美しく見せ、かつ患者に限らず周りの方にとっても好感が持てるようにしていくことは大切なことである。看護の技法としてこの知識を身につけておくことは重要ではないかと考える。

おわりに

本研究のように看護の視点から新たな創作活動を行うことで、闘病生活を送る楽しみを与えることは、患者と共に看護職も癒されることであることは既に報告している⁴⁾。それはラッピング技法を用い、いろいろな看護活動をしたときにも同様であり、少なくとも以下のようなことを今後の課題とし

て考えておかなければならない。

〈ラッピング技法の利用上の課題〉

1. テーマに適合した素材や方法(一人で制作するのか、誰かと組んで行くのか)などの検討
2. テーマに応じて表現をする時期およびその期間の設定
3. 利用できる有効な壁面や空間などの場の選択
4. 使用器材や資料などの選択
5. 使用器材や素材などの経費の見積
6. 作品の社会的な危険性の有無の判断
7. 作品の品位の確保

城一夫によれば、「絵画は画家が自己の自由な発想の赴くままに、自己表現の手段として作品デザインはユーザーのニーズに合わせて、機能、用途、価格、装飾性などを考慮して、「モノ」を立案、設計することに他ならない。」⁵⁾という。すなわち、芸術家の絵画は自己の表現で装飾性のあるモノを生み出すことである。これを看護にあてはめると、ラッピング技法を用い、看護的な表現でアメニティを狙って行うことは、誰もが上手下手はともかく患者の療養のために自己の表現をしていくことになると言えよう。

作品の制作には個人の持つ感性を問われる。しかし、ラッピング技法を用いて何かを表現しようとした時、看護職が日常生活の場面において形態や色彩などに、いかに興味を持って見ていくかが問われる。こうした作品作りは自己の個性を見つけ、技術を磨いていかなければ、独創性のある作品は生まれにくい。そうした積み重ねがあって廃品の活用や新しい素材の発見などを初めて見つけられると考える。

臨床看護は感染や衛生面から清潔、不潔の視点を問われながら実践がなされている。特に、高度医療になればその要求は強く、情緒面へのアプローチは薄れやすく、医学的、看護的な面で治療やその援助が強化されやすい。だが、人はいかなる時も心の豊かさや安らぎが必要であり、隔離された状況であればあるほど、気持ちの安堵さへの看護は重要になってくる。こうした点において近年では「癒し」についての重要性が言われるようになってきた。普通の家庭ならば張り紙をするときにはインテリアに応じた張り方をするが、公的な病院や保健所になると、周囲との調和を図り、かつ、掲示を見やすくすることで美しく見せるように張るというより、整理整頓をして見やすく掲示するというレベルで終わりやすい。すなわち、張られたものが周囲の環境に調和しインテリア化を狙ってまで掲示することは考えないのである。一方、家庭の場合には個人的な志向を入

れ、周囲の調和を図り望ましい空間環境を作るように努力する人は多いだろう。従って、今後は公共の場である病院や保健所や保健センターであっても好ましい環境を作り、快適な場所への努力をすることは当然のことと考えたい。反面、公共の場所をある個人の好みによりアメニティの演出をすれば良いというものではない。それには公共の場所であり、かつ、その場所の意味や情景を理解し、それに応じたあり方を日常生活において演出していくことも大切なのである。それには色彩と照明、物の造形への関心、空間やインテリアの知識など、アメニティをもたらす知識が、一層、必要になってくるだろう。

最後に本論文に当たり多大なご支援を頂きました岡山大学医学部附属病院の皆様に御礼を申し上げます。

文 献

- 1) ADEC 色彩士検定委員会：Color Master, 全国美術デザイン教育振興会, 2000.
- 2) 池上惇：生活の芸術化, 丸善ライブラリー, 16, 東京, 1993.
- 3) 西尾正和：贈り物の概論, 食品研究社, 693, 東京, 1998.
- 4) 小野清美, 原 量宏, 柳原敏宏：平成10年度及び平成11年度科学研究費補助金基礎研究一妊娠に伴う車運転の安全性に関する研究一研究報告書, 31, 香川, 1999.
- 5) 城 一夫：生活デザインの社会学, 1, 明視社, 1999.

Attempts to create the amenity from the nursing point of view — Through approach by using the wrapping skills —

Kiyomi ONO, Yuko HAYASHI, Nobuko OHI, Hiroyuki OKUDA
and Kiyonori YAMAOKA

Abstract

The importance of producing the comfortable environment, namely to create the amenity for the patients admitted in the hospitals, has been recognized recently. In this study, to create the better amenity for admitted patients' daily life by the nurses, we examined the influence of the ways of displaying, placing and decorating the daily materials, such as booklets, tea cups, letters and etc. on a bed side table, using the wrapping skills.

As a result, we found out that creating the amenity using the wrapping skills might be useful for the admitted patients' care and their mental healing. Furthermore, we indicated some important points when using the wrapping skills, such as selecting appropriate materials and methods suiting for each subjected matter.

Key words : amenity, wrapping skill, life in hospital, color, care healing

Faculty of Health Sciences, Okayama University Medical School